

美術の授業の個別指導における授業改善

～個別指導における教師の立ち位置に意味をもたせた指導～

教育研究所 佐々木 和哉

1 授業改善の視点

授業振り返り表より

- ・ 机間指導における個別指導の在り方

2 具体的な実践

(1) 生徒に向き合うように立つ



この位置に立つときは、生徒と学習の視点をもとに考えを話し合い、学習を深めさせるようにする。

具体的には鑑賞活動において、個々の生徒に考えを持たせる支援をしたり、鑑賞の視点に気付かせたりする時にこの位置に立つことが多い。

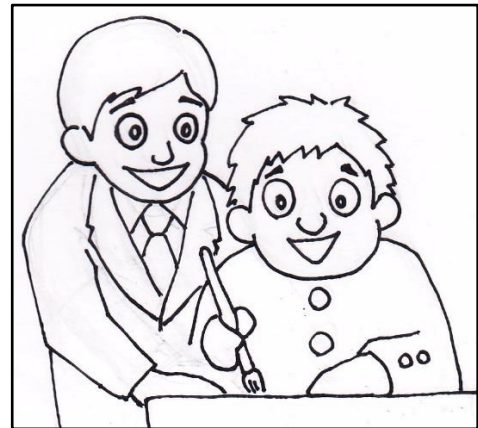
私は、鑑賞学習で個別指導する時にはこの位置に立ち、「自分だったらこう考える...。」という考えを投げかけたり、着目し欲しい所を指し示し、生徒の考えを聞いたりする。そうすると、生徒はその意見や指摘に対して、彼らなりの考えを話すようになる。

言い換えると、この位置に立つときは生徒と対話をするように考えを導く指導をするわけである。

この鑑賞学習を終えた後、ある生徒が次のように学習を振り返っていた。

今日は、大学生の描いた自画像を何枚も鑑賞しました。先生が「表現の共通点を見つけてみよう」と課題をだしたんだけど、はじめはどれも違う自画像に見えてしまって、表現の共通点を見つけられませんでした。でも、先生の示した共通点を聞いたら、「なるほど!」と思って、たくさん見つけられました。違う作者が描いた自画像でも、ポーズとか、体の向きとか、表現の共通することはたくさんあるのだということがわかりました。

(2) 生徒の横に並んで立つ



この位置に立つときは、生徒の考えに共感したり、生徒が表現の中で困っていることについて話を聞いたり、具体的な実技指導をしたりする。

技能の学習をする時は、生徒と同じ視点で示すことが、効率的な理解を促すために大切なポイントである。特に個別指導における技能指導は効果がある。この効果をより確実なものにするためにも、

技能指導は、必ず生徒の横に立ち、同じ視点から見て、一緒に考えるように配慮するのである。



この指導の後、生徒は確かな技能で表現の追求ができるようになった。

(3) 生徒の後ろに立つ



この位置に立つときは、基本的に生徒の追求を見守るようにする。

具体的には、表現のアイデアを発想する学習の時や、黙々と制作に取り組んでいる時にはこの立ち位置をとるようにしている。

表現を追求している過程の中では、声をかけられることがプラスに働く場合と、逆に思考や発想の広がりを止めてしまつてしまうようなマイナスに働く場合があると考えられる。

生徒が黙々と表現を追求しているとき、私はできるだけこの位置から生徒の追求を見守り、思考を止めないように配慮するようにした。そうして様子を見つめ、追求の価値に気付かせるように気を配り、その後、学習集団の中で価値付けたり、学習を方向付けたりするようにした。

3 実践を振り返って考えられること

個別指導は、全ての生徒に声をかければよいというものではない。特に私が専門とする美術は、生徒にとっては個別指導がプラスに働く場合と、そうでない場合があり得る教科である。生徒には、本当に声をかけて欲しい時と、声をかけて欲しくない時がある。

だからこそ、個別指導はねらいをもって行わなければならない。ただ、漫然と生徒の間をあるいているようでは効果的な個別指導は期待できない。

どのように生徒の間を歩き、生徒に寄り添い、学習を支えるかを見直すことで、個別指導の効果は劇的に変わると考える。

